

学生優秀発表賞受賞者：工藤裕基 演題番号 学44

## 日本海裂頭条虫感染の1症例報告

工藤 裕基\*1§ 畠山 真奈美\*1 仲山 春恵\*1 迫 康仁\*2

### I. 研究の概要

#### 【はじめに】

日本における寄生虫症は、戦後の公衆衛生の向上により大きく減少したといわれている。しかし、寄生虫は多種多様であり、近年、アニサキスなどといった寄生虫感染が問題となっている。その中で裂頭条虫症は発生頻度が高く、年平均で40例前後の症例が国立感染研究所に報告されている。日本海裂頭条虫は、サケやマスなどに寄生する幼虫(プレロセルコイド)を経口摂取することにより感染する。その日本海裂頭条虫症の1症例を経験することができたため報告する。

#### 【症例および方法】

症例：10代男性(筆者本人)。排便時に肛門から長い「きしめん様」の虫体が下垂しているのを確認した。そこで、寄生虫種を同定するために、①糞便検査(直接塗抹法および集卵法)、②片節の形態観察、③遺伝子検査(Multiplex PCR)を行った。症状は軽微な下痢のみで、腹痛は認められなかった。虫体確認より数ヵ月前にサケを生食していたことから、サケが感染源として推察された。

#### 【結果および考察】

直接塗抹法では虫卵を確認することは困難であったが、集卵法より60~70×40~50 $\mu$ mの楕円形、淡褐色、小蓋がある虫卵が確認できた。また、排出された片節を観察した結果、生殖器様構造がみられた。以上のことから、裂頭条虫と推定し、

日本海裂頭条虫または広節裂頭条虫を疑い、遺伝子検査(Multiplex PCR)を行った結果、日本海裂頭条虫と同定された。

検査終了後、プラジカンテル20~30 mg/kgを内服し、下剤により虫体を排出し治療を行った。排出された虫体から頭節を確認することはできなかったため、経過観察を行うこととした。その後、虫体の排出および虫卵は検出されなかったため、根治されたと考えられた。

#### 【結 語】

今回、日本海裂頭条虫症を身をもって経験したことで、寄生虫症が身近なものであると再認識することができた。寄生虫症の診断は一般に虫卵検査が重要であり、虫卵の特徴やライフサイクルを判断し、寄生虫を推定、鑑別するという、これまで学んできた寄生虫検査法の基本が如何に大切であるかを痛感した。

### II. 受賞の感想

今回第13回日本臨床検査学教育学会学術大会において優秀発表賞を頂くことができ、大変光栄に思います。発表に向けて内容をまとめることの難しさや人前で発表するために緊張感をもって取り組んだことは、初めての経験で学ぶことの多いものでした。また、受賞することができ嬉しく思うと同時に、大きな自信となりました。この貴重な経験を今後の活動に生かし、今回発表した寄生虫分野だけでなく、様々な分野に挑戦していきたい

\*1 北海道医学技術専門学校 § yuu.2.10.dunk@icloud.com \*2 旭川医科大学医学部寄生虫学講座

いと思います。

ご指導いただいた先生方をはじめ、多くの方の協力があったの受賞だと思っています。この場をお借りして深く感謝を申し上げます。

### III. 将来への抱負

本学会を通して、他校の学生さんや先生方の発表を聞く機会ができ、とても勉強になりました。そして、何よりも自分自身が発表をしたことで、臨床検査学に対する見方が変わり、更にたくさんのことを学びたいという向上心を持つことができました。この思いを絶やすことなく、常に大きな目標を持ち、臨床検査技師として活躍したいと思えます。また、今後ともこのような学会などへの発表を積極的に取り組み、医療現場で幅広く活躍できる臨床検査技師を目指したいと思えます。

### IV. その他

今回、自分自身が寄生虫感染を身をもって経験したため、色々な意味で忘れられないものとなりました。感染前は寄生虫は教科書でしか見ないものと思っていましたが、実際に感染したことで寄

生虫症が身近なものであると再認識しました。最初に感染に気付いた時は、寄生虫学を学んでいたため、あまり焦ることもなく裂頭条虫ではないかと疑いました。その後数回に渡り、排便時に寄生虫を確認したため、学校に持っていくことにし同定までの検査を行いました。すぐに駆虫せず、わざと自分の体で飼い、虫体や虫卵を採取するなど工夫を行いました。もし自分が北海道医学技術専門学校に通っていなかったら、冷静に対処できず不安になっていたと思います。同定の検査を進めていくうちに、先生がこの学会を勧めてくださり、このチャンスを無駄にしたいと思いません。この機会に挑戦することにしました。

今回の発表は、自分自身が感染したこと、この度の学会発表が札幌開催であったこと、臨地実習期間で実習先の病院の協力を得られたことなど、様々な要因が偶然重なって発表するチャンスをいただけました。何かの縁があって発表できましたが、人生を左右するきっかけとなり、学会発表や研究発表などに興味を持つことのできる良い経験となったと思います。